#### はじめに

「ホームレス」と「子ども」。そこには、どんな接点があるのでしょう。

「ホームレス襲撃」は、子どもたちが加害者となる、「路上のいじめ」です。

害者にも被害者にもしたくないと願うすべての人に、ぜひこの本をとおして、「ホームレス」と「子ども」を めぐる現状を、他人事ではない問題として、ともに見つめ、いっしょに考えていただけたら幸いです。 たとえいま、ホームレス問題に関心がないという人でも、子どもを育てている親や教師、子どもたちを加

一九九七年十月に刊行された前著『大阪・道頓堀川「ホームレス」襲撃事件――"弱者いじめ』の連

23ページ)、あとは、ほぼそのまま前著を再録しました。 第Ⅰ部《ゼロ》――大阪「道頓堀川ホームレス殺人」事件』では、前著の内容に一部加筆し(65~71ページ、

鎖を断つ』(太郎次郎社)に、大幅な書き下ろしを加えた、大増補新版となります。

化する予定だった内容を、いまここに収録することができました。 第Ⅱ部″野宿者と子どもたち――川崎の取りくみ₡は、九七年前著の刊行につづく「第二弾」として単行本

痛感しています。「派遣切り」や貧困問題への関心とともに、ホームレス問題が注目されるようになったい 全国初のその川崎市の教育の取りくみは、十数年たっても、いまだ類をみない、画期的で貴重なものだと さらに子どもたちの「ホームレス襲撃」問題がより深刻化するなか、ぜひとも、この〈川崎の取りくみ〉

の実践記録を、全国の学校・教育現場で、生かしていただきたいと強く願っています。

材から、 げるにいたった現在までの、二十三年間の軌跡をあらためてたどり、総括するものになりました。 したものです。この十四年間の襲撃事件だけでなく、八六年、中二少年の「葬式ごっこ・いじめ自殺」の取 第Ⅲ部″いじめの連鎖を断つために──いま、なにができるか〟は、二○○九年時点で、新たに書き下ろ 子どもたちの現場を歩くようになった私が、「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」を立ちあ

こうして、三冊分の内容を一冊にもりこんだ、厚い本になりました。長い旅になりますが、ご同伴いただ

けたら幸いです

ように『人』をさす言葉では、ありません。しかし日本では、「ホームレス」もまた特定の人びとへの蔑称と 環境にない」といゔ状態ムをさす言葉であり、これまで差別的に使われてきた「浮浪者」「ルンペン」などの して使われていたり、ホームレス問題が、社会の問題としてではなく、個人の「人間性・自己責任」の問題 なお、「ホームレス」という用語についてですが、これは本来、居住権が保障された「安心できる適切な住

間)などと表現し、それ以外で、状態ではなく人をさす用い方の場合は「ホームレス」として括弧書きで表 本書では、基本的に、いま野宿生活(ホームレス)状態にある人として、野宿(生活)者、 野宿の人(仲 として切りすてられている現状があります。

記しました。また、文中の年齢・肩書き、および用語表記などは、取材当時のものです。

して、いまここから出会っていただけたなら、それ以上の喜びはありません。 この本を手にしてくださったあなたが、ホームレスな人たち、子どもたちと、 ともに幸せに生きる仲間と

第一部〈ゼロ〉 -大阪「道頓堀川ホームレス殺人」事件 1995―1997

『事件』の原風景

被災地・神戸の金髪少年

16

i

プロローグー

路上に生きた命 道頓堀の『橋の子』たち 人間」の街・釜ヶ崎 92 56

ii

# 第Ⅱ部野宿者と子どもたち

-川崎の取りくみ 1995―1997

大人たちの自問―――265

第Ⅲ部いじめの連鎖を断つために **いま、なにができるか 1997―2009** 

**暴発する怒り────**322 317

殺したものと殺されたもの

自尊感情の回復―――361

あとがき―――418

402

卷末資料

- 野宿者襲撃事件・略年表

### プロローグ

# 「ホームレス殺人」事件の初公判

一九九六年一月二十三日、大阪地方裁判所二〇一号法廷。

傍聴席最前列の記者席は、マスコミ関係者で埋まっている。 私はその二列後ろに腰かけ、 メモの用意をし、

被告人があらわれるはずの黒い扉のむこうに意識を傾ける。

の初公判がはじまろうとしていた。 「道頓堀川ホームレス殺人」事件の主犯格として殺人容疑で逮捕され、傷害致死罪で起訴された青年。ゼロ』

午前十時。「それでは、審理をはじめます」。開廷をつげる裁判長の声と同時に、法廷内の空気がぴんと

張りつめる。

るようにしてはいってきた。

やがて扉がひらき、手錠をかけられ腰をロープでゆわえられた青年が、二人の刑務官に両脇をかかえられ

刈りだったはずの頭は、黒ぐろとした角刈りになっている。中背の、がっちりとした体格。が、厚い背中は はじめて見る、ゼロだった。くすんだ茶色のジャンパーに、ブルージーンズ。逮捕当時、 金髪のスポーツ

まえかがみに丸くなり、 わずかにのぞく横顔は、おどおどした幼い子どものように緊張してみえた。

〈ゼロ〉

ロープがはずされ、ゼロは裁判長席の正面に立った。

裁判長が人定質問のなかで、被告人の氏名、 生年月日、 年齢、 職業、 住居、 本籍地などを確認する。 昭和

四十六(二九七二)年、大阪市生まれ、二十四歳。

「起訴状には〝住居不定〟となっていますが、逮捕されたとき、住居は決まっていましたか?」

裁判長の質問に、 ゼロはキヲツケの姿勢で「ハイッ!」と答え、少したどたどしい口調で、大阪府内の実

家の住所を述べる。

「仕事は? 無職?」

「ハイッ!」

「とくに何もしてなかったのですね?」

「ハイッ!」

両手をピシッと体の両脇につけたまま、ゼロは同じ返答をくり返す。

大阪地方検察庁の検事による、起訴状の朗読がはじまる。

五・四メートル下の道頓堀川の水中に投げ落とす暴行を加え、よって、同日午前十時二十二分ころ、大阪市 十月十八日午前八時三十三分ごろ、大阪市中央区の道頓堀川(水深約三・1メートル)に架けられた戎 橋上にお 上からよろめきながら立ちあがった藤本に対し、その身体をTとともにかつぎ上げて、 き、同人を道頓堀川に投げ落とそうと企て、T(原文は本名)と共謀の上、戎橋中央東端付近において、台車 いて、手押し台車の上で仮眠していた藤本彰男(当時六十三歳)を認めるや、同人を浮浪者と思って嫌悪感を抱 「被告人は、かねてからいわゆる浮浪者に対して嫌悪感を抱き、攻撃的な行動をくり返していた。平成七年 戎橋の欄干ごしに約

ふたたび、裁判長がゼロにたずねる。

「いっていることは、わかりますか?」

「ハイッ!」

「どこか、まちがいがありますか?」

「まちがいないですッ!」

きっぱりとゼロは答えた。

「弁護人は、どうですか?」

「被告人の陳述どおりです」

ゼロの弁護人もまた、起訴事実を認めた。

「では、これから証拠調べをします」 こうして、初公判ははじまった。

って、思いがけない展開をみせていくことになる。

しかし、裁判の行くえはその後、被告人ゼロが「ホームレス」の藤本さんを死に至らせた犯行状況をめぐ

## 金髪ゼロの指名手配写真

その事件を最初、私は新聞報道で知った。

阪神・淡路大震災の衝撃とともに幕をあけた一九九五年。私はその年の二月から、予定していた仕事をす

べて変更し、震災後の神戸にかよいづめていた。そして、六度目の神戸取材から一週間ぶりに東京の自宅に もどったばかりの十月のある夜、私は、留守中たまっていた新聞の束からなにげなく一部をひらき、 愕然と

《道頓堀川のホームレス殺人 鉄パイプで殴り川へ 2容疑者に逮捕状》

ショッキングな見出しとともに、 容疑者の青年二人の指名手配写真が目に飛びこんできた。

いやな予感を確かめるように、 私はあわてて記事の内容を読み、その事件がすでに五日もまえに起こって

いたことをはじめて知った。

概要と経過は、つぎのようなものだった。 さらにほかの日の新聞の社会面をめくり、 私はこのかんの事件報道をもう一度たんねんに追った。 事件の

一九九五年十月十八日朝。大阪市中央区の繁華街″ミナミ〟の戎橋のうえで、台車に寝ていた「ホームレ

ス」の男性を、「通りかかった若い男たちが道頓堀川に投げ落として逃走した」と、一一〇番通報があった。 目撃者らによると、 男性が川に落ちたあと、現場にいた若者二人は橋のうえから様子をうかがっていたが

男性が浮かんでこないため近くの工事現場からロープを調達して、助けに川岸まで降りていった。が、発見

できず、「一一○番しろ!」という通行人の声に、あわてて逃げ去ったという。

警察のボート捜査の一時間後、男性は水深約三メートルの川底で発見され、病院に運ばれたが、まもなく

死亡。死因は、水を大量に飲んでの窒息死だった。 亡くなった男性は、道頓堀界隈で段ボールを集め、古紙回収業者に売って生計をたてていた住所不定の藤

本彰男さん(六十三歳)と判明した。身長約一五○センチの小柄な体に、グレーの作業服に紺色のズボン姿。

遺体に所持金はなく、 業者の出した伝票だけがポケットに残されていた。

の南詰めの戎交番には、二人の警官が勤務していたが、事件には「まったく気づかなかった」という。 んへの暴行を止めようとするものも、 午前八時半の橋の現場には、出勤途中のサラリーマンや通行人の主婦、 助けようとするものもなかった。現場からわずか十数メートル 朝帰りの若者らがいたが、 藤本さ 先の橋

捜査本部は、現場から逃走した若者二人を、殺人容疑で全国に指名手配した。主犯格とみられ

事件翌日、

ら彼らといっしょに姿を消した元ウエイターの男性(二十二歳)を、 二人はともに「無職」で、日ごろから戎橋の周辺でたむろしながら夜を明かしていたという。さらに現場か た黒いジャンパーを着ていたという。共犯者とされた容疑者Tは、茶髪にジーパン姿、元会社員の二十五歳 た容疑者Sは、 通称。ゼロ《と呼ばれる二十四歳の青年で、髪を金色に染め、背中と袖に龍の刺繡しまり 捜査本部は参考人として行くえを追って 繍が はいっ

本部に出頭し、参考人として事情聴取に応じた。三人は事件当日、そろって東京都内に逃亡したが、二人が 大阪府警南署捜査本部に移送された。また、行くえ不明だった元ウエイターの男性はその後、 ゼロは逃亡先の東京・新宿区歌舞伎町のゲームセンターにいたところを巡回中の新宿署員に逮捕され、 事件発生から二日目、 Tは大阪・摂津市内の公園のベンチで寝ていたところを逮捕される。 自分から捜査 同

さらに三日

殺害容疑を否認していたが、 捜査本部の取り調べにたいし、ゼロは動機について「悪ふざけのつもりだった」と供述した。 捜査本部が追及したところ、容疑を認めたという。 逮捕当初は、

先に大阪に戻り、

ゼロだけが東京に残っていたらしい。

14

しかし、社会面のトップを飾った「犯人逮捕」のニュースから二日後、ゼロとTそれぞれの弁護士による

会見発表の記事がつぎのように報じられた。

《道頓堀殺人の二容疑者 殺意や犯行を否認 弁護士が会見》

どろかせるつもりで体を持ちあげて、欄干の上に座らせたが、とっさに服をつかまれ、振りはらったら落ち てしまった」と殺意を否認しているという。またTは、「自分は見ていただけ」と、容疑そのものを否認して 弁護士によると、ゼロは被害者の藤本さんを「二人で抱えて投げこんだ」のではなく、「自分ひとりで、

事件の真相もまだ不透明ななかで、マスコミはいっせいにこの二人の容疑者を、「極悪非道な殺人犯」と 警察発表とは異なる両容疑者のその『否認』内容が、私は気になってしかたがなかった。 いることを明らかにした。

の痛みへの想像力が欠如」した現代の若者の、「非人間的」で「逸脱した暴力行為」といった論調でかきたてた。 してセンセーショナルに報じた。「なんてむごい」「血も涙もない」「鬼や」といった街角の声をひろい、「人

ならない、どんな背景があったのか。そして、夜の歓楽街で段ボールを集め、「野宿労働者」として生きて いた藤本さんが、なぜそこで殺されなければならなかったのか。 毎晩のように橋のうえで夜を明かしていたというこの無職の青年に、人を襲い殺めてしまわねば

は一人の少年の面影をかさねあわせていた。 スポーツ刈りの髪を金色に染めていたという容疑者ゼロの、指名手配写真を新聞で見たとき、 とっさに私

″これはタツヤだ。あの子だってやってたかもしれない

その夏、神戸で出会い、いっしょにテント村で過ごしてきたタツヤもまた〝黄色い髪〟の家出少年だった。